

# 飛雲

前

ワキ 熊野の山伏

ツレ 同行の山伏

シテ 樵の翁

後

ワキ 前に同じ

ツレ 前に同じ

シテ 鬼神

地は 信濃

季は 秋

「遙けき国を三熊野の。く。苔路や旅の始めなる。

「是は本山三熊野の山伏にて候。我未だ羽黒山に参らず候ふ程に。唯今羽州に下向仕り候。

「行く末も。遠山伏の摺衣。く。遙々来ぬる旅をしぞ。思ひの末も幾日数。幾夜重なる麻衣。木曾の掛橋谷深み。かけぢの末も暮れかゝる。雲の八重山いかばかり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は、や木曾路に着きて候。暫く

此所に休まうずるにて候。

「馴れつゝも。妻木の道の苦しきや。重なる老の坂ならん。

「余りに苦しう候ふ程に。薪を下し休まばやと思ひ候。

「不思議やな是なる山賤を見れば。所こそ多きに。分きて紅葉の陰に休む気色。心有り顔にて優しうこそ候へ。

シテ「本より賤しき賤の男の。何の心の候ふべき。彼黒主が歌の心は。薪を負へる山人の。花の木陰に休むけしきを。残し置きたる筆の跡。我等が休むも紅葉の木陰。いたづら事にて候ふなり。」

ワキ「実に心ある答へかな。先々紅葉の名所々々。彼方此方に多けれども。彼業平の心には。神代も聞かずと言ひ置きし。」

シテ「名にも龍田の紅葉の色。」

ワキ「初瀬の山は檜原が木の間に。色洩れ出づる村紅葉。」

シテ「又は八塩の岡のもみぢ葉。」

ワキ「其外高雄。」

シテ「嵐山。」

地「色々を。四方に染めなす秋の日の。く。朝には雪としぐれ。夕べには雨とそゞぎ。このもかのも草木の。はや下染も時過ぎて。百入千入に薄き濃き。梢の秋は面白や。」

シテ「白露も。」

地「白露も。時雨もいたく漏る山は。下葉残らぬもみぢ葉を。片敷く今宵山伏の。一夜を明かし給はゞ。我も歸りて夜もすがら。夜遊を慰め申さんと。谷の戸深く入りにけり。く。」

ワキ「あら恐ろしの気色やな。小夜も半に更方の。」

ツレ「月影闇き山中に。」

ワキ「行くべき方もあらざれば。」

ツレ「あらたなりける夢の告と。」

ワキ「頼みを掛けて。」

ツレ「読誦する。」

二人「南無や開山役の優婆塞。殊には三熊野三所権現。力を添へてたび給へ。」

地「不思議や峨々たる石根に。く。黒雲一村起ると見えしが。谷峰一同に響き震動し。磐石を碎き木を折る嵐に。先立ち飛雲の光りの内に。顕はれ出

づる鬼神の姿。面をむくべき様ぞなき。

ワキ 「東方に降三世明王。

ツレ 「南方に軍荼利夜叉明王。

ワキ 「西方に大威徳明王。

ツレ 「北方に金剛夜叉明王。

ワキ 「中央に大日大聖不動明王。

二人 「唵呼嚕々々旋荼利摩登柁。唵阿毘羅吽劍蘇嚩訶。

地 「鬼神の通力忽ちに。く。明王の繫縛にかゝると

見えしが。飛行をなして上らんとすれども。大地  
に斃れ伏し起きつまろびつ。おのれと身を責め苦  
しむ気色に。行者の威力いよく増さり。数珠さ  
らくと押しもんで。見我身者発菩提心。く。

聞我名者断悪修善。聴我說者得大智恵。智我心  
者即身成仏。即身成仏と祈り伏せ。行者は遙かに  
立ち退けば。

シテ 「不思議や今までは。

地  
「不思議や今までは。大勢力の鬼神と見えしが。立ちどころに弱り伏して。唯茫然と起き上りて。たゞよひ行くと見えつるが。有りつる姿は雲煙。有りつる姿は雲煙と。立ち消えて。鬼神の姿は失せにけり。